

Title	十四世紀のフランス語(I) : Michel 版 Joinville に見られる言語の分析
Author	森本, 英夫
Citation	人文研究. 27 卷 6 号, p.354-367.
Issue Date	1975
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

十四世紀のフランス語 (I)

—Michel 版 Joinville に見られる言語の分析—

森 本 英 夫

0. フランス語の歴史の上で、古期フランス語から中期フランス語に移っていく時期は、十四世紀であるとされ、カペ王朝に代わって新たにヴァロア王朝が成立した年(1328年)ないしは百年戦争勃発の年(1339年)におよその境界線が敷かれている⁽¹⁾。勿論言語の変化は緩慢かつ持続的なものであることは言うまでもなく、日付を定めたからといって昨日までの言語が今朝からは新しいものになっているわけではない。以前の言語状態を表わす特徴が徐々に崩れていき、同時に新しい言語状態を示す特徴が次第に顕著になって来る。そんな過渡期が続くのであり、十四世紀はまさに古期フランス語から、中期フランス語に移る過渡期であると言える⁽²⁾。

古期フランス語の言語状態を特徴付ける現象としていま形態・統辞論上の問題に限って言うなら、名詞統合(限定詞、名詞、形容詞)における主格・斜格(cas-sujet et cas-régime)という二格体系の存在、人称代名詞主語の未文法化、そして格の存在に起因する語順の自由、更には従属構文の単純さなどを挙げることが出来よう。一方中期フランス語では、語末子音字の黙音化という音声上の現象の外に、二格体系の崩れ、斜格への統一、代名詞主語の文法化、語順の定着、従属構文の複雑化、とりわけ関係代名詞 *quoy* や *lequel* の多用、現在分詞の頻繁な使用などが特徴的現象として指摘され得よう⁽³⁾。

この小論では、古期フランス語を特徴付ける、上に示した現象がどのように崩壊して行き、同時に中期フランス語を特質化する現象がどのように現われて来ているかを、十四世紀のテキストにおいて調べてみようとするものである。

筆者が分析の対象に選んだのは Jean de Joinville の *Le livre des saintes paroles et des bons faits de notre saint roi Louis* である。この作品が書かれたのは 1309年10月であるが⁽⁴⁾、Joinville 自身はどちらかと言えば十

三世紀の人間である(1224年~1317年)。Joinvilleにとってルイ九世は主君であると同時に友人であり、共に聖地を襲う異教徒と闘って来た仲であった。Joinvilleが参加しなかった最後の十字軍を率いたルイ九世は1270年Tunisで帰らぬ人となったが、このルイ九世について思い出を書くようにPhilippe le Belの後妃Jeanne de Navarreに求められ、そして出来上がったのがこの作品である。完成の4年前に依頼者はこの世を去っていたので、未来の国王Louis le Hutinに献上された。この作品の、今日残されている最も古い写本は十四世紀後半のものである。1858年にFrancisque Michelはこの最古の写本を忠実に転写して刊行した。しかしNatalis de WaillyはJean de Joinvilleの残した他の文献などを利用して、十三世紀の、彼の出身地であるシャンパーニュの方言でこれを再構成した(1868年)⁽⁹⁾。今日Pléiade叢書に収められているPauphilet編纂の*Histoire de saint Louis*もこのWailly版に依ったものである。しかし乍らこの*Histoire de saint Louis*に見られる言語は、あくまでもWaillyが推測して再構成した言語であって、自然の言語状態を表わしてはいない。J. Bédierの言を借りるなら『ただ残念なことはN. de Waillyの版では、他の点では価値あるものなのに、編者がこのテキストを偽シャンパーニュ方言で書き改めるべきであると思ったことだけである』⁽¹⁰⁾。十四世紀後半の写本に見られる言語を十三世紀のものに戻すという無理の外に、そもそもJoinvilleがJeanne de Navarreから依頼された時期が既に十三世紀が終り十四世紀を迎えた頃であり、更にJeanはこれを書生に口述筆記させているということから考えて、原本そのものにWaillyが書改めたどの程度の古期フランス語の特徴が見られたか、はなはだ疑問である。ちなみにWaillyが払った最大の努力は格の問題にすぎない。そんな理由から我々としては十四世紀のBruxelles写本を忠実に転写したというMichel版から⁽¹¹⁾、十四世紀という過渡期のフランス語の姿を捉えてみようと思うのである。

1. 古期フランス語を特質化する最も著るしい現象は、名詞統合における主格・斜格という二格体系の存在であろう。この男性主格単数に見られる形態部-s、および同主格複数の-φ(形態部ゼロ)は、語末子音の黙音化、主格の頻度の低さ、格意義の乏しい女性名詞の影響などの理由から、丁度これと逆の形態部関係にある斜格にその地位を奪われ、-φは単数の、-sは複数の意義を持つのみとなり、格の意義は消えてしまう。冠詞を始めとする限定詞や

形容詞もこれと運命を共にする。

しかし格の崩れは必ずしも十四世紀に始ったものではなく、anglo-normand 方言などでは既に十二世紀から見られ、我々はあのオックスフォード写本版の *La Chanson de Roland* の例を知っている⁽⁸⁾。格の保持が最も長かった北東部の方言も含めて、十四世紀になると主格は全般的に消滅していく。

この点について我々のテキストでは、既にその大部分が、今日のフランス語と同様に格の区別を失ってしまっている。しかし時折古い主格に出合う。いまこの古い主格の例を、名詞、限定詞、形容詞（過去分詞）について拾ってみると次のようになる。

A cas-sujet singulier

(a) **li roys** 型

li roys ne fait pas(VI), **li roys** appella(VI), Si y preingne garde **li roys** (VII), se **li roys** vous amoit(IX), auquel **li roys** devoit(IX), se **li roys** vous avoit baillé(IX), fist **li roys**(X), sur quoy **li roys** tenoit(XIV), et lors passa **li roys**(LIX), **li roys** me conta(LXII), **li roys** le vous mande(LXII), se **li roys** leur vourroit(LXVII), quant **li roys** oy ce(LXXI), **li roys** eust pooir(LXXXII), **li roys** s'an va(LXXXIII), or est fol, **li roys** (LXXXIV), fist **li roys** (LXXXVI), cui **li roys** avoit donné(LXXXVI), **li roys** m'avoit baillé(XCVIII), **li roys** l'avoit (CI), **li roys** fist grant honneur(CI), **li roys** y prenoit devant(CXLI); dist **li mestres**(IX), fist **li mestres**(IX), fist **li esveques**(IX), fait **li sains**(VII), comme **li huges** (CXII); **mes chastiaus** est en marche(LXXXIII), comme vous qui estes **ses hoirs**.(II); car **nulz chevaliers**, ne povres ne richez, ne peut revenir... (LXXXII), lesquiex roches **nulz hons** ne passa onques. (XCIII)

(b) **le roys** 型

a ce respondi le **roys**(XIII), la terre que le **roys** emporta(XXIII), le **roys** fist clorre(XXXVIII), le sages **hons**(XCIII), et le **lyons** s'arestoit (XCVI), le **califes** li respondi(CXIV), le **Sarrasins** ... nous amena(LIII); un aultre **sergans** le roy(CIV), qui estes un joenes **hons**(LXXXIV), larges est le **Frans**(LXVII)

(c) **li roy** 型

li roy ne vouloit(XLI), se **li roy** s'i acordoit(XCIX), **li ferrais** l'em-

poissonna(XXXI), **li** tiers a banière(LXXXVI), Jehan **li** Ermin(LXXXV III); ot **uns** Sarrasin(XXXVI), que **uns** ferrais... li avoit donné(XXXI)

(d) 限定詞なし
 Se **Diex** morut(I), a cui **Diex** bone merci face(II), se **Diex** vousist dire(VII), se **Diex** ne m'eust aidié(XXV), que **Diex** absoille(XXVII, LIV, LXXXIII, LXXVIII, CXXXVI), aussi comme **Diex** voutt(XXXIII), se **Diex** ne m'eust(XXV), lors envoya **Diex**(LXIV), comme **Diex** yert (IV), si m'aïst **Diex** (LXXXIV), et **Diex** te doint(CXLV), en ceste persecucion me salva **Diex**(LXIV), Biaux sire **Diex**(XV), Biau sire **Diex**(XLIII, CVIII); le conte **Pierres**(XVIII), **Scededins**... se estoit le plus prisié(XLII), rescout messire **Erars**(LXI), **Philippes**, son filz aisé, fut malade(CXLV), Or dit saint **Anciaumes**(VII)

(e) adjectif

i) épithète: le **sages** hons(XCIII), un **traitres** sergant(LXII), qui estes un **joenes** hons(LXXXIV), **biaus** sire Diex (XV), car nulz chevaliers, ne **povres** ne **richez** ne peut revenir... (LXXXII)

ii) attribut: il ne sceit pas ne n'est **certeins**... (IV), pour ce que il estoit **sours**(XLV), **larges** est le Frans(LXVII), le soudainc, qui estoit **joenes** et **legiers**, s'enfui... (XLIX), il qui moult estoit **soutilz** (CXIII), l'ennemi est si **soutilz**(VIII), soies **diligens**(CXLV)

(f) participe passé

croisiez estoit-il(I), Il me demanda si je vouloie estre **honorez** en ce siècle(III), & s'en feust bien **soufers**(III), en ses paroles fu-il **attrempez**(III) le cors Nostre-Seigneur qui estoit **devenuz**(X), car il estoit **esmuyz**(XXIV), fu **nez** Jehan mon filz(XXV), Roger estoit **criez**(XXV II), nulz y feust **retrouvez**(LVIII), qui estoit **nez**(LXXIII), dont il estoit **revenus**(XCVII), il fu **baptiziés**(CXXXVIII)

B cas-sujet pluriel

(a) **li**+ ϕ 型

tuit li autre **chevalier** vindrent(VI), furent **li notonnier** si desesperez (VII), **tuit li** **baron** de France(XVIII), **li** **pylet** leur chéioient (XLIII), pour ce ne font force **li** **Assacis**(LI, XC), **li** **amiraut**... prirent conseil

(LXIX), mez **li amiral** se tindrent(LXXI), vindrent **li leur**(XCV), comment **li soudanc** tenoient(LVI), **li trois cheval** et il alèrent(CIV) **tuit li autre roy** et **li autre pelerin** se tenroient(CVIII), et **li terrier** enterroient(CXI), benoit soient **tuit li apaiseur**(CXXXVII), **tuit li saint** te gardent(CXLV); ou sont **mi prodomme?** (LXXVII); **maint marceant** lessierent(XXXVI)

(b) **li+-s** 型

tuit li cinquante chevaliers mangoient(XCVIII)

(c) **les+-φ** 型

les **seigneur terrier** ne s'i vouldrent acorder(CX)

(d) 限定詞なし

i) il estoient **frere** de sanc(XCVII), (il) estoient **chievetein**(LIV) ii) vocatif pluriel: **seigneur**(LXIX, CII, CXI, CXII)

(e) adjectif

i) attribut: touz ceulz qui croient en la loi Haali sont **mescreant** (XC), les despens de ton hostel soient **resonable**(CXLV), nous feussions **certein** que... (LXX)

(f) participe passé

touz ne feussent **mort**(XXXIX), et pluseurs d'eulz en estoient **entré** ou flum et furent **noyé** (XXXIX), dont il furent **mort** ou navrez(LIX), nos esteingeurs furent **appareillé**(XLIII), il estoient **venu**(XCIII), quant il furent **esleu**(XCIII), ainsi feussent-il **decopé**(XCVII), lors (il) estoient **alié**(XCVII), nous chevauchions **armé**(XCVIII), nous feussions **hurté**(CXXII), nous estiens **couchié**(CXXIV), touz vilains pechiez soient **osté** de la terre(CXLV)

1-1. まず単数形から吟味していこう。この単数主格を残している名詞の中で、roys と Diex とが圧倒的に多いのに気付くであろう⁽⁹⁾。72例のうち roys は27, Diex は19で、それぞれ37.5%と26.3%, この二語で全体の三分の二を占めている。Roys と Diex とは極めて頻度の高い単語であり、それだけに格の保持も多く見られる。その外の名詞については、我々のテキストがいわゆる「歴史もの」であることを反映して、Philippes, le Sarrasins など人名または国籍を示すものや, li mestres, le califes など身分・地位・職

業を示すものが多く、ごく一般的な名詞としては *chastiaus*, *lyons* などが見られるにすぎない。また *hons* では *-s analogique* が見られる (< lat. *homo*)。これらは殆んど全てが主語として機能しているもので、*Diex* が *vocatif* として3例、属詞として現われている場合は2例である。

Diex および固有名詞を除き、いずれも何らかの限定詞を伴っているが、次表のように定冠詞に結び付くものが最も多く、しかも主格の *li* との結び付きが一般的である。不定冠詞や所有詞を伴っているものも認められるが、指示詞との結び付きは見られない。名詞自体は *-s* を失ってしまっているのに、限定詞に格が見られるものは7例。逆に限定詞が斜格で名詞に *-s* が残っているものは10例。全体として、限定詞、名詞共々主格の例が最も多い。

Dét	zéro	Art-Déf		Art-Indéf		Poss			Total
		le	li	un	uns	mon	mes	nulz	
-s	24	8	27	2	0	0	2	2	65
-φ	/	/	5	/	2	/	0	/	7
	24	8	32	2	2	0	2		72
		40		4		2		2	

1-2. 形容詞の主格単数に *-s* の付くものは12例あり、まず *épithète* として現われているもの6、*attribut* として8。*épithète* としての例では *traitres* 以外は名詞も主格形を残している。*attribut* の場合主語に呼応して格語尾を残しているのは *larges* のみで、他は全く自立的である。少い例中で *joenes* と *soutilz* は共に2回現われているが、*soutilz* は *filz* などの *analogie* が働いているとも考えられる。

過去分詞に格語尾 *-s* が残っている例もそれほど多くはない。これらも *attribut* としての形容詞と全く同じであるが、*retrouvez* は主語としての *nulz* に惹かれたと言うことが出来る。先に不定形容詞として *nulz* が *hons* と *chevaliers* に、更に *povres* と *riches* にも結び付いていたのを見て来たが、このテキストでは、不定代名詞としての主格も *nulz* が圧倒的に多い。一応筆者はその外に *aucuns* という主格形が見られることから、これらの *nulz* を単数主格として扱ったが、同じ否定の働きをする *rien* がこのテキストでは殆んど *riens* の形で出現していることと考え合わせると、*-s adver-*

bial からの類推も考慮せねばならない気がする⁽⁴⁰⁾。

1—3. 単数主格が72例見出されたのに比べて複数主格は26例しか見出されない。複数では単数の場合のように、ある特定の単語に集中することもない。Vocatif として現われている *seigneur* および属詞としての *frere*, *chievetein* 以外はいずれも主語として限定詞を伴っている。

Dét	zéro	Art-Déf		Poss		その他		Total
		les	li	mes	mi	maint	tuit	
-φ	6	1	16	0	1	1	(5)	25
-s	/	/	1	/	0			1
Somme	6	1	17	0	1	1		26

定冠詞 *li* を伴う場合が殆んどで、所有詞および *maint* がそれぞれ1例見られる。この複数の場合、*touz* の外に、古い主格複数である *tuit* を伴った例が5つ見出される。なお複数でも指示詞は見られない。

形容詞については *épithète* に主格形の来るものは、例文に挙げてある不定形容詞 *autre* だけで、普通の形容詞の例は見られない⁽⁴¹⁾。Attribut では2例である。過去分詞は13例見出され、単数形の場合より多くなっている。なお例文の中には、*mort et navrez* のように、語尾に *-s* の付いたものと付かぬものとが並置されているものも見られ、こういった主格形が用いられることが全く無意識的であることを示している。

以上我々は名詞統合における格の問題を見て来た。そしてこのテキストにおいては既に新しい *φ-s* による数の対立の時期に入っているものの、いまだに古い主格形もいくらか見られること、とりわけ *roys* や *Diex* といった名詞、更には限定詞としての定冠詞にこの名残りが留められていること、などを認めて来たのである。形態上ではなく統辞上興味ある現象として、我々は次のような名詞の並置による斜格の属格用法を指摘することも忘れてはならないだろう。

Et devant la table **le roy**, endroit le conte de Dreuez, mangoit monseigneur le roy de Navarre... (XXI); Le soir, au solleil couchant, nous amena le conestable les arbalestiers **le roy** à pié. (L); De la femme **monseigneur Erart de Brienne** ne vous dirai-je ore riens. (XVII)

このテキストでは同様の例が実に頻繁に見られる。主として身分関係の繫りを示すこの統辞法は、格の区別が失われても依然生きており、いまだ前置詞 *de* を介する統辞法にその席を譲るには到っていない¹⁰⁰。

1-4. 主格が消滅し斜格が生き残る運命の中であって、若干の名詞は逆に主格が生き残って来た。その典型的な例として我々は *filz* (CR. *fil*) を知っている。この *filz* についてテキストで調べてみると、ほぼ *filz* が、つまり古期フランス語の主格形が支配的である。

Après ces choses, monseigneur li roys appella monseigneur Phelippe son **filz**.(VI)

しかし我々は次のような斜格形の *fil* の例にも出合うのである。

le conte Tybaut, qui estoit **filz** du secont **fil** de Champaigne (XVIII); ... comme entre le conte de Chalon, oncle au seigneur de Joinville, et son **fil** le conte de Bourgoingne... (CXXXVII); Et pour la pez du père & du **fil**... (CXXXVII); & il li dit que il seroit plus couroucié de son **fil**... (LXXXVIII); Biau chier **fil**, je te donne toutes les benéissons que bon père peut donner à **fil**. (CXLV)

最後の例に見られるように、斜格形の *fil* が呼格にも現われている。

Mots imparisyllabiques である *enfes-enfant*, *cuens-conte*, *seor-seror* などについては、このテキストでは主格形は現われない。興味深いのは *sire-seigneur* である。この語は主格も斜格も生き残るのであるが、このテキストでは次のような出現になっている。

		sire	seigneur	messire	monseigneur
vocatif	a)	100	0	0	0
	b)	6	0	2	1
sujet	a)	21	6	4	95
	b)	2	5		

まず *sire* はもっぱら一般的な呼称として現われている (100例)。

Lors me dit mon Sarrasin: «**Sire**, je ne vous suivré plus, car je ne puis: mez je vous pri, **sire**, que cest enfant...»(LXV)

しかし *sire* には身分地位を示す意味があり、この意味の場合には限定を伴う。この意味での *vocatif* は6例見られる。

《*Sire* de Joinville, je vous aime moult.》(LXXX); Or est fole, *sire* de Joinville, li roys. (LXXXIV)

主語, 同格, 属詞として見出される *sire* は勿論「領主, 殿様」としての意味である。

Le *sire* d'Arzur appella un chevalier de Gennes(CVI); Roger, le *sire* du chastel estoit... (XXVII); Je, Jehan *sire* de Joynville, seneschal de Champaigne, faiz escrire la vie nostre saint Loos(III); et l'apostele des Sarrasins, qui estoit *sire* de la ville(CXIV)

なお「天主」を意味する *Nostre-Sire* が2例見られる。

Nostre-Sire nous donra plus de bien en cest siecle et en l'autre.(VII)

一方 *seigneur* は, 単数の呼称としては見出されない。—ただし複数については, *seigneurs* および *seigneur* が一般的な呼称として現われていることを見て来た⁽⁴⁾。この *seigneur* の主語属詞としての例は *sire* に比べて遙かに少い。6例のみである。なお *Nostre-Seigneur* は *Nostre-Sire* より多く5例となっている。

...moult estoit hardi *son seigneur*(LXXXIX), *monseigneur* Huedes de Monbeliart... qui estoit *seigneur* de par sa femme (CII);... *monseigneur* Gobert d'Apremont son frere; en cui compagnie, je, Jehan *seigneur* de Joinville, passames la mer... (XXIV): *Nostre-Seigneur* fait pour li maint bel miracle.(XI)

所有形容詞 *mes* と結び付いた *messire* は敬称として用いられるが, 所有形容詞の *mes* が既に *mon* に取って代わられているせいもあって, *vocatif* に2例, 主語として4例見られるにすぎない。

...rescout *messire* Erars de Walery(LIX), *Messire* Gui d'Ybelin,... s'agenouilla encoste moy(LXX); 《*Mesire* Erart, il me semble que vous feriés vostre grant honeur...》(XLVI)

この *messire* に比べて *monseigneur* は, 呼格としての出現は1例にすぎないが, 主語としては95例と断然多く見られる。

《Lessiés-moy en pez, *monseigneur* Phelippe》(LXXXIV), ...mangoit *monseigneur* le roy de Navarre(XXI), Là fu navré *monseigneur*

Hugue. (XLVI)

以上のように sire はこのテキストでは呼称として、また主語として、seigneur を遙かに凌いでいるが、敬称としての messire は、monseigneur にその地位を殆んど奪われてしまっている。

1—5. 限定詞の中で冠詞と所有詞は幾分古い主格を残しているのが認められたが、指示詞に関しては、格の問題としては浮び上って来なかった。しかし指示詞も本来格変化を有していただけに、この時期での相貌を捉えておくのも意味あることと考えられる。

古期フランス語における指示形容詞には近いものを指す *cist* と、遠いものを指す *cil* との二つがあり、原則的には定冠詞と同様 *i/e* によって主格／斜格の対立が認められていた。

		Sing.		Pl.	
		m.	f.	m.	f.
{	cas-sujet	<i>cist</i>		<i>cist</i>	
	cas-régime		<i>ceste</i>		<i>cestes</i>
{	cas-sujet	<i>cest</i>		<i>cez</i>	
	cas-régime	(<i>cestui</i>)			
{	cas-sujet	<i>cil</i>		<i>cil</i>	
	cas-régime		<i>cele</i>		<i>celes</i>
{	cas-sujet	<i>cel</i>		<i>cels</i>	
	cas-régime	(<i>celui</i>)			

この体系も、主格の消滅と共に多少の変化が生ずる。複数で *cez* が *cels* を吸収し *cestes*, *celes* が消えてしまう。新しく *ce* が出現し、遠近の意味が薄れて来、やがて *ce-cette-ces* が今日の形容詞に、*celui-celle* が代名詞に定着するのである⁽⁴⁾。所でこのテキストではどのような出方を示しているであろうか。

次表から明らかなように、古期フランス語に見られる主格形は姿を消してしまっている。一般に *cest* は形容詞性が強く、*cel* は代名詞として出現する方が多いと言われているが、男性形は別にして、女性形を見ると、64対66ではほぼ同じ比率の出現となっている。興味あるのは男性主格単数形 *cest* の例が見られぬことである。それに代って新しい *ce* が出現している。この *ce* の起源については未だ確かなことは分っておらず、一般に *cest* が音的变化を

		proximité	éloignement	neutre
<i>Msing</i>	{ C-S	(cest 0)	{ cel 2 iceluy 1	ce 22
	{ C-R	{ cest 35 cestui 1 cesti 1	{ cel 6 celui 2 celi 12	ce 65
<i>Fsing</i>	{ C-S	ceste 9	cel(1)e 12	—
	{ C-R	ceste 55 (106)	cel(1)e 54 (89)	—
<i>Mpl</i>	{ C-S	—	iceulz 1	ces 13
	{ C-R	—	—	ces 32
<i>Fpl</i>	{ C-S	—	—	ces 10
	{ C-R	—	—	ces 66

蒙って ce になったと言われている⁽⁵⁾。成程単数主格としての cest の例が無いことを考える時この仮説は成り立ちそうであるが、斜格として35例も cest が見られることを考えると、ce と cest とは無縁と考えたくなる。筆者としては中性代名詞 ce (<lat. ecce hoc で ecce iste からの cest とは関係がない) からの類推から生じたものと考えてみたい。つまり丁度この指示形容詞 ce は、中性代名詞 ce が頻繁に用いられる頃から現われて来ているし⁽⁶⁾、意味的にも単に指示機能を持つのみである。そしてこの ce の出現がやがて遠近性を失わせる一因となったと考える方が自然だからである。

男性では cel は cest に比べて可成り少い。主格として見られるものの中に、本来 datif を示す iceluy が見られる。

il li mandoit que **iceluy** preudomme avoit moult bien vescu.(XCVII)

所でこのテキストでは、cest と cel との間に、あるいはこれらと ce との間に、どのような意味の差が認められるのであろうか。次の例は cest と cel とに本来の意味が残っている。

《...mez je vous pri, sire, que **cest** enfant que vous avez avec vous, que vous le tenez touzjours par le poing,..》 Et **cel** enfant avoit non Berthelemin. (LXV)

Yvon は Wailly 版に見られる cist と cil を分析している中で、cil の例が、この作品に占める récit の割合に比べて少いこと、cist は dialogue, récit 共々可成り多く、ほぼ接近した割合で見られることを述べた後で、cil はあ

る場合には *cist* と対立しているが——そして同様の対立が *cist* と *ce* にも見られる——, *cist* と *cil* には, *dialogue* の場合を別にして, 意味上の差が殆んど無いと述べている⁽⁹⁾。しかし *cest* の35例中, 母音の前に見られる9例を除いた26例の中に, 明らかに近いものを指す意味での用法が *livre*(6), *siecle* と *monde* (6), *païs* (6)の4語に集中して見られる事実は見逃がせないし, *cel* について8例のうち7例までが母音の前に置かれていることも次の体系へ一歩踏み出していることの証拠でもある⁽¹⁰⁾。 *ce* については必ずしも *cest* と対立するばかりでなく, *cel* と対立する価値を持つ例を見出すことも難しくはない。

vous alez en Acre à ce quaresme qui vient(CXXI)

複数では1例のみが *iceulz* で現われている。

Iceulz Blans furent abatus au concile de Lyon(CXLIII)

残りはすべて *ces* で現われている。この *ces* については先にも少しく触れたように, *cest* 系列の男性複数斜格の *cez* が *cel* 系列の *cels* を吸収し, *les*, *mes* などとの類推から *ces* になったと説明されている⁽¹¹⁾。起源は起源としてこのテキストに見られる状態では, もはや遠近の対立もなく, 性の区別も格の区別もないのであるから, 表に示したように *cest-cel* という単数形とは別の範疇に, つまり *neutre* のそれに入れざるを得なくなる。従って我々のテキストでの関係は次のように図示することが出来る。

	ce			
	(neutre)			
<i>sing.</i>	cest (m)		cel (m)	
	ceste (f)		cele (f)	
	(spécifique)			
<i>pl.</i>	ces			
	(neutre)			

1-6. 以上我々は名詞と限定詞を中心に格の問題を見て来たのであるが, 古い二格体系は僅かの名残りを留めているにすぎず, 新しい言語に衣替えしつつあることを認めざるを得ない。定冠詞およびそれを伴う名詞, *roys*, *Diex* といった特定の名詞に古い主格がいまだ若干認められるものの, 指示形容詞では, 既に主格の消滅から次の段階に進んでいるのである。

また形態部 *-s* の意義の変化に伴い、古期フランス語ではそれ自体複数であった *il* (<*illi*), *leur* (<*illorum*) などに複数表示の *-s* の出現が見られ始める。

ilz se assembleroient(XVIII), *ilz avoient...* (XCII),
touz leurs heritages(XX), *de leurs cors sarrasinnoiz*(XXXII), *leurs enfans*(LXXIII)

しかしこのような例はいまだ僅かであり、これらが支配的になり、形態的に定着するには更に長い年月が必要であった。

注

- (1) 中期フランス語 *moyen français* をいつから認めるかについては様々の意見がある。Brunot は「ヴァロア王朝成立直後」(*Histoire de la langue française* T. I p. 421), Nyrop は「十四世紀末」(*Grammaire Historique de la langue française* I. p. 40), Wartburg は「十四世紀後半」(*Evolution et structure de la langue française*, p. 126), Dauzat は「百年戦争から (1340)」——ただし目次では1328になっており、日本語訳も1328年を採用している——(*Les étapes de la langue française*, p. 69) となっている。なお P. Guiraud; *Le moyen français*, P. U. F. を参照。
- (2) 一般に中期フランス語そのものが過渡的状態のフランス語を指しているとも言える。cf. Brunot: *ibidem*. p. 421
- (3) cf. Guiraud; *op. cit.* p. 95
- (4) テキストの末尾に《Ce fu escript en l'an de grace mil CCC & IX, ou moys d'octovre》と記されている。
- (5) cf. Bossuat: *Manuel Bibliographique de la littérature française du Moyen Age*, d'Argences 1951. p. 344.
- (6) Bédier et Hazard: *Histoire de la littérature française illustrée* I, Larousse, p. 109 《il est à regretter seulement que dans ses éditions, par ailleurs précieuses, Natalis de Wailly, ait cru devoir récrire le texte en un dialecte pseudo-champenois.》
- (7) cf. Bossuat: *ibidem*. p. 333 《Les éditions de Michel... ne font que reproduire le ms. de Bruxelles.》
- (8) cf. Brunot: *op. cit.* p. 320. Guiraud: 《L'expression du virtuel dans le *Roland d'Oxford*》 in *Romania* LXXXIII, 1972. M. K. Pope: *From Latin to Modern French*, Manchester, 1934. p. 462.
- (9) この *Diex* について Brunot は、この形が名格・呼格には永く残り、16世紀の文法家の Barcley が、名格としての *Dieu* が母音の前にある時 *s* を響かせるべきだと述べていることに触れている。cf. *op. cit.* p. 432
- (10) *nulz ne pouvoit morir qu'à son jour* (LI) また *nul* の例として *dont je oy recorder que nul n'en y avoit eschapé* (XXXIX), *nul ne peut morir que à son jour* (LI) など数例見られる。aucuns の例は: *aucuns l'avoit achetee* (CXL) のみである。なお *riens* については *De la femme monseigneur Erart de*

Brienne ne vous dirai-je ore **riens** (XVIII) と副詞の s を伴っている。Gardner & Greene はこれを十五世紀に好まれた形としているが、(cf. *A Brief Description of Middle French Syntax* Chapel Hill, 1958 p. 125) 十四世紀から既に現われている中期フランス語の特徴と言えよう。

- (11) épithète の付いた主格複数の例は見られないが、斜格では次のように形容詞に -s の無いものが現われている。car il auoit illec **bon** phisiciens qui bien savoient guerir de la quarteinne.(CXLIV)
- (12) Gardner & Greene: *op. cit.* (p. 5) では十四世紀の *Fouke Fitz Warin* や *Cyrurgie* ではこの古期フランス語の構文が好まれていることが指摘されている。
- (13) le conte Gautier vint à nostre gent, & *leur* escria: «**Seigneur**, pour Dieu alons à eulz»(CII), et je *leur* dis: «**Seigneur**, vous ne fetes pas bien» (CXI); & *leur* dit: «**Seigneur**, e vous priet commant de par le roy»(CXII)
- (14) cf. Glanville Price: *The French language: present and past*, Edward Arnold, 1971, pp. 121-127 なお指示詞については特に A. Dees: *Etude sur l'évolution des démonstratifs en ancien et en moyen français*, Wolters-Noordhoff Publishing, 1971, Yvon: «Cil et cist, articles démonstratifs» in *Romania* LXXII 1951; *dito*: «Cil et cist, pronoms démonstratifs» in *Romania* LXXIII, 1952; Guiraud: «L'assiette du nom dans *la Chanson de Roland*», in *Romania* LXXXVIII, 1967 などを参照。
- (15) cf. Price: *op. cit.* p. 125, Dees: *op. cit.* p. 14
- (16) このテキストにおいても中性代名詞の ce は, Gardner & Greene が記しているように (*op. cit.* p. 75) 主語として: Quant **ce** fu fait (LV), 補語として: Quant il orent **ce** fait (LIII), 前置詞の補語として: pour **ce** commanda le roy (XLI), その外接続詞句の構成要素となったり, 関係代名詞の先行詞になったりして, 可成り頻繁に見られる。
- (17) cf. Yvon: «Cil et cist, articles démonstratifs» pp. 178~180
- (18) cf. Price: *op. cit.* p. 125
- (19) cf. Price: *op. cit.* p. 124; Dees: *op. cit.* pp. 14~15

(à suivre) le 31-VIII-1975